

2023年度事業計画

2023年度、公益財団法人泉屋博古館は以下の各事業を行います。

1. 保存公開事業

(1) 展覧会

泉屋博古館(京都本館)は、下表のとおり青銅器展および企画展4展を開催する。

1) 青銅器館

展覧会名	期間・日数	予算(千円)
本館青銅器展 「中国青銅器の時代」 第1室 青銅器名品選 第2室 青銅器の種類 第3室 青銅器のなかの動物たち 第4室 青銅文化の展開	企画展と同じ (157日)	2,393
開館日数計	157	2,393

2) 本館企画展

展覧会名	期間・日数	予算(千円)
「光陰礼讃—近代日本最初の洋画コレクション」 印象派と古典派、旧派と新派の作品が対照的に収集された経緯や特質を「光陰」ととらえながら紹介します。	3/14～5/21 (59日)	4,311
「歌と物語の絵—雅やかなやまと絵の世界」 文学を題材とした日本絵画をとりあげ、絵巻や屏風、扇など日本に特徴的な形式に展開する物語と歌の絵の華麗な世界を紹介します。	6/10～7/17 (33日)	2,936
「泉屋ビエンナーレ2023」 中国青銅器を含む金工作品の啓蒙と、現代鍍金作家への活動支援を目的として、作家11名による新作とオリジナル作品を紹介します。	9/9-10/15 (32日)	15,062 (うち特別 賛助金5,000)
「特別展 表具の美—ある表具師のものがたり」 装飾・演出から保存まで、知恵と美意識が凝縮した表具。その多彩な展開とこめられた思いを探ります。住友春翠と表具師井口邨僊との関わりにも注目します。	11/3～12/10 (33日)	6,766
開館日数計	157	29,075

本館共通費用	780
本館展覧会費計	32,248

泉屋博古館東京(東京館)は、下表のとおり企画展5展を開催する。またリニューアルオープン後の新たな試みとして、当館コレクションの形成の歴史や特徴を通してその価値を後世に伝える小規模企画展示(常設名品展示)をあわせて行う。

3) 東京館企画展

展覧会名	期間・日数	予算(千円)
「不変／普遍の造形－住友コレクション中国青銅器名品選」 東京館のリニューアルオープンにあわせて、住友コレクションの中国青銅器の名品を一同に会する展覧会。	1/14～2/26 (38日)	9,268 (うち 助成金4,734)
「特別展 大阪市立東洋陶磁美術館 安宅コレクション名品選101」 国際的にも知られる東洋陶磁のコレクション「安宅コレクション」はその散逸の危機に際し、住友グループにより大阪市へ寄贈されました。大阪市立東洋陶磁美術館所蔵の同コレクションから珠玉の名品101件を紹介します。	3/18～5/21 (56日)	31,431 (うち 特別賛助金 21,000)
「特別展 木島櫻谷展－山水夢中」 近代京都の日本画家木島櫻谷。写生を踏まえた近代的風景から独特の観念的山水まで、変遷しつつも生涯描き続けた山水画。底流にある精神世界を探ります。	6/3～7/23 (44日)	8,080
「楽しい隠遁生活－文人たちのマインドフルネス」 厳しい現実から逃避するために積極的な隠遁をめざす「過激な」隠遁から、田舎暮らしのスローライフを求める「楽しい」隠遁まで、中国と日本の文人画を中心に多種多様な隠遁スタイルが見いだせる絵画を紹介します。 常設名品展示：住友の彫刻	9/2～10/15 (38日)	5,081
「日本画の棲み家」 展覧会場で不特定多数に鑑賞されるのとは異なる、日本画の底流に確かに位置していた邸宅の座敷を飾る「床の間芸術」の魅力とその行方を紹介します。 常設名品展示：住友の床の間(仮称)	11/2～12/17 (40日)	5,998
開館日数計	216	59,858

東京館共通費用	2,354
東京館展覧会費計	62,212
展覧会費用合計	94,460

(2) 収集事業

当館コレクション充実のため、当館収蔵品と関連のある作品収集を継続する。近世末から近代にかけての絵画、工芸を対象とし、購入、寄託、受贈の検討を進める。本年度は、近代銅花器64件ほか(華道家大郷理明氏所蔵品)の受贈、および林谷五郎の七宝小箱、幹山伝七の花瓶、橋本雅邦の日本画、計3件の購入を実施したい。(予算5,000千円)

(3) 修復事業

以下の修復及び調査を行う。

- ・重要文化財「木彫阿弥陀如来坐像」(2022年開始～23年3月完了)
費用2,020千円(23年支出、国庫・住友財団助成)
- ・日本画1件(尾竹国観「絵踏」)の修復(予算5,500千円)

- ・青銅器 1 件の修復（予算 467 千円）
- ・茶道具の仕覆、御物袋など付属品の修復（予算 500 千円）
- ・洋画額その他小修繕、燻蒸（予算 950 千円）

（４）館蔵品管理事業

①館蔵品データベースの新システム移行につき、2024 年度完成を目処に、本年度中に現行データベース（ファイルメーカー：拠点別ローカルファイル）の内容を精査・整理し、移行と運用におけるルール（クラウド上の全館統合データベースにアップする情報の種類、画像の扱いなど）を定める。

移行の際業者に提供するデータ（画像、関連資料など）の取りまとめを行う。

②京都本館改修に向けた館蔵品整理作業を進める。また保存展示施設の事例調査を行う。

2. 調査研究事業

（１）館蔵品基礎調査研究

館活動の根幹となる館蔵品の基本的調査研究を実施する。

テーマ	期間
「茶道具の調査研究」 （森下） 館蔵の茶道具について、新収品を中心に、①付属品の再調査、②購入記録並びに茶会記との照合を行い、江戸期から大正期に至る茶道具のコレクション形成史をまとめる。	2020 年度より継続
「館蔵の洋食器を中心とした近代洋食器研究」 （森下） 明治時代以降、洋食器文化の輸入により日本各地で洋食器が生産されるようになった、住友コレクションには住友家の洋館で使用された、最初期ディナーセットなどがみられる。当時の国内における洋食器の供給ならびに需要者について調査を実施。	2021 年度より 5 年間
「館蔵中国陶磁の基礎研究」 （竹嶋） 館蔵の中国陶磁の基本調査および箱書の記録を行う。本年度は、茶会記に登場する日本書画のデータベース化を実施。近隣の茶会記所蔵館での調査も予定。また専門家の協力を得て、技法や産地、時代的特徴も明らかにし、中国陶磁に関する展覧会を将来開催することを目指す。	2023 年度より 3 年間
「館蔵竹工芸の基礎研究」 （竹嶋） 館蔵の竹工芸（花入、茶杓、蓋置）や籐工芸（花籠）、瓢工芸（花入れ）等の基本調査および箱書の記録を行う。また専門家の協力を得て、技法や時代的特徴も明らかにし、竹工芸に関する展覧会を将来開催することを目指す。	2023 年度より 3 年間
「日本近代銅器の基礎的調査研究」 （廣川・山本・竹嶋） 現在受託中の日本近代銅花器と蠟型/石膏型資料について、受贈にむけた整理および基礎データ取得を実施し、その特徴を把握することにより、日本近代金属工芸の展覧会を将来開催することを目指す。	2023 年度より 2 年間

<p>「泉屋博古館記録資料のアーカイブ化」（竹嶋）</p> <p>館の歴史を物語る設立以来の資料の整理に着手する。具体的には映像資料、建築資料のデジタル化と各資料に関する聞き取り調査を実施予定。</p>	<p>2022年度より2年間 （本年度予算 320 千円）</p>
<p>「館蔵書画の表装裂のデータベース作成」（実方）</p> <p>館蔵書画に用いられる表装裂について材質、組成、文様などの基礎情報構築を専門家の協力を得て進める。さらに伝来や装丁者など表装の成り立ちの調査も行う。</p>	<p>2020年度より3年間（継続）</p>
<p>「館蔵洋画の調査研究」（野地）</p> <p>館蔵洋画・彫刻に関しては、河久保正名や仙波欣平など、優品が収蔵されながら見落とされてきた作家・作品が散見される。また岸田劉生など近年の研究成果を踏まえ多視点からの見直しを推進する。</p>	<p>2020年度より5年間</p>
<p>「館蔵日本画及び洋画の基礎研究」（椎野）</p> <p>館蔵の日本画及び洋画に関して、引き続き同時代資料の収集を行い、展覧会出品歴等の基礎情報を確認する。特に明治～大正時代に描かれた日本画を取り上げ、作品が受容された場（近代の床の間など）をめぐる問題を検討する。</p>	<p>2020年度より3年間（継続）</p>
<p>「美術品収集経緯研究」（全員）</p> <p>継続実施している明治大正期住友家美術品収集経緯の研究について、昭和期の購入資料の検討とデータベース化を完成させる。明治～昭和の全データの統合をめざす。</p>	<p>2015年度より8年間（継続）</p>

（2）専門研究

館蔵品に関連する分野において、専門的研究を行い、その成果について、学会発表、紀要などの学術雑誌や図録での公表を行う。

テーマ	期間
<p>「中国先秦時期の社会と文化」（小南）</p> <p>中国先秦時期（二里头文化から秦漢帝國の成立まで）の社会制度や思想文化などにについて、出土文物と文献資料とを相互に参照し、その中国的特質の形成について検討する。</p>	<p>2022年度より5年間</p>
<p>「中国近世の文芸と民衆信仰」（小南）</p> <p>中国近世の民衆文芸について、文献資料と実地調査とにもとづき、民衆的な信仰と生活倫理のありかたについて探求する。現在、コロナ禍のため現地調査が不可能であるため、壁画墓の画像を資料として、二十四孝觀念の時代的な変貌を追求し、中国近世倫理の形成について考える。</p>	<p>2017年度より3年間 （科研費） 2020年度より3年間 （一年延長）（科研費）</p>
<p>「中国古代贈与儀礼の研究」（山本）</p> <p>中国古代におこなわれた贈与儀礼について、古典文献に加えて新出の考古資料・文字史料も踏まえつつ、その歴史的展開と国家形成とのかかわりについて検討する。</p>	<p>2022年度より4年間 （科研費申請予定）</p>

(3) 他研究機関との共同調査研究

館蔵品関連分野の研究を多角的に推進するため、他研究機関との共同調査を実施する。

テーマ	期間
<p>「木島櫻谷の調査研究」（実方） 今年度は櫻谷文庫所蔵資料のうち、マクリ資料を同文庫と共同で調査実施。また継続中の櫻谷宛書簡類整理のまとめをめざす。</p>	2009年度より継続
<p>「中国古代青銅器製作技術の研究」（山本・廣川） 当館所蔵青銅器及び中華民国国立中央研究院歴史語言研究所所蔵青銅器及び鑄型を調査対象として、商代から戦国時代にかけての青銅彝器製作技術の解明を目的とした研究を、歴史語言研究所、芦屋釜の里と共同で実施する。23年度はこれまでの研究成果をもとにした鑄造実験及びその状況を記録する4K動画撮影を実施する。</p>	2020年度より5年間 （海外調査に関わる費用は科研費を充当） （本年度予算400千円）
<p>「中国青銅器の高精度三次元計測データの解析」（廣川） 富山大学芸術学部と共同で実施している青銅器の三次元計測データについて、断面形状および全体厚偏差分布の解析を実施する。23年度は主に青銅楽器について解析を進める。</p>	2020年度より4年間 富山大学研究代表科研課題の分担研究
<p>「日本茶道文化史における中国金工品の受容と展開」（山本） 日本中近世の茶道具の中には、その淵源を中国青銅器にまで辿れるものが少なくない。これまで茶道文化史において正当な位置づけがなされていない金工品を中心に実見調査等を行い、唐物受容の新たな一側面を探っていく。茶道資料館・芦屋釜の里との共同調査研究。</p>	2020年度より4年間 研究助成金申請検討中（2021年度より三者協定締結） （本年度予算400千円）
<p>「近代染織史の基礎資料研究」（森下） 館蔵の染織作品を基本資料として、近代の染織品における様式変遷ならびに技法を比較する。東京文化財研究所無形文化遺産部と共同研究を行う。2021年に開催した「型紙と型染」研究会の報告書をまとめ、2023年刊行を目指す。</p>	2020年度より4年間（2015年より継続）
<p>「展覧会芸術研究」（椎野） 近代日本画における主題選択や表現様式を変容させた展覧会の制度に注目し、同時代資料から「展覧会芸術」という言葉の使用範囲と用法を探る。</p>	2020年度より5年間
<p>「古代東アジアの祥瑞と王権—漢～唐代成立の瑞獣画像をめぐる学際的研究—」（山本） 東アジア古代の王権と密接な関係を有する祥瑞の図像のうち、漢唐間に成立した瑞獣に焦点を当て、学際的アプローチによってその歴史的展開を明らかにする。</p>	2022年度より4年間 二松学舎大学研究代表課題の分担研究

<p>「図像・出土器物・文献資料による古代東アジアにおける饗宴システムの復元と比較研究」（山本） 東アジア古代国家の成立と深く関わる饗宴システムについて、出土資料・文字史料の両面からその成立・展開過程を追い、東アジア世界へ拡散する様相を広域的な比較検討によって明らかにする。</p>	<p>2022年度より4年間 大手前大学研究代表課題の分担研究</p>
<p>「吉田ふじを基礎研究」（椎野） 洋画家・吉田博の妻であり、女流洋画家の先駆けでもある吉田ふじをについて、遺族のもとに遺された基礎資料の整理を行い、画業とその史的位置について明らかにする。</p>	<p>2023年度より5年間 東京文化財研究所の研究者と合同研究</p>

3. 広報普及活動

大学教育への協力事業として非常勤講師出講および見学受入等を行い、さらに社会教育事業の一環としてミュージアムボランティア養成研修を実施する。また展覧会や研究活動をより多くの方に理解して頂くために、関連書籍の刊行および各種講座、講演会、シンポジウム、ワークショップなどを開催する。

内容
<p>(1) SNS、HPを活用した広報活動 Facebook・Twitter・Instagramの各SNSの特長を活かし、イベント案内等をスピーディーに告知し、展覧会や美術館の魅力をビジュアルで配信する。またウェブサイトを多言語化（英語ページ追加）し、各種情報を早期に発信する。</p>
<p>(2) 講演会・シンポジウムの開催 【本館】外部講師による講演会やゲストトークを開催する。 【東京館】講堂における連続講座および、展覧会関連のゲストトークを開催する。</p>
<p>(3) イベント 【本館】ワークショップ、夏休み企画等、各種イベントを計画。 【東京館】ワークショップ、コンサート等、各種イベントを計画。</p>
<p>(4) 学芸員によるスライドトークの開催 本館・東京館にて展覧会毎に2～4回程度開催する。</p>
<p>(5) 青銅器解説ボランティアの養成 【本館】ボランティア解説員のレベル維持・研鑽のため、研修を年2回程度開催する。</p>
<p>(6) 青銅器鑑賞コンテンツの制作 【本館】3Dデータ、VR画像を利用した双方向体験型プログラムを開発する。 【東京館】青銅器展開催時に鑑賞コンテンツを活用する。</p>
<p>(7) 大学への出講 【東京館】野地（成城大学、通期）</p>
<p>(8) 近隣美術館等との連携 【本館】野村美術館との「京都東山 美術館さんぽ」継続。 【東京館】大倉集古館・菊池寛実記念智美術館との連携推進。「港区ミュージアムネットワーク」および「ぐるっとパス2023」への継続加盟。</p>

<p>(9) 紀要・図録等の発行</p> <p>①『泉屋博古館紀要』第39巻 500部(2023年12月)</p> <p>②『太古の奇想と超絶技巧 中国青銅器入門』 新潮社発行 5,000部のうち200部買取(2023年1月)</p> <p>③『大阪市立東洋陶磁美術館展』図録 青幻舎発行 5,000部のうち4,000部買取(2023年3月)</p> <p>④『泉屋ビエンナーレ2023』図録 1,500部(2023年9月)</p> <p>⑤『日本画の棲み家』リーフレット 500部(2023年11月)</p>
<p>(10) ミュージアムグッズの開発・制作</p> <p>ミュージアムショップにて販売する、館蔵作品モチーフのミュージアムグッズの再版および新規開発。館蔵作品の魅力を新たな切り口で発信。</p>

4. 施設への対応

項目	内容	予算(千円)
本館改修工事基本設計	築50年を経た本館について、建物劣化診断調査およびそれを基に今後30年間を見据えた中長期保全計画を策定し、施設の現状利用状況を踏まえた将来に向けての改修の基本設計を実施する。	22,000

以上